

山と博物館

第48巻 第10号 2003年10月25日

市立大町山岳博物館

初めて見る爺ヶ岳石室の写真

峯村 隆



大正9年7月13日 竹内鳳次郎撮影(竹内家提供)

長野県は大正八(一九一九)年、増加する登山者の利便と安全のため、十箇所に石室を設置することを決定した。

十箇所とは当初、白馬岳、白馬鍾ヶ岳、大黒岳、二ノ股、槍ヶ岳、乗鞍岳、赤石岳、東駒ヶ岳、岩菅山、八ヶ岳で、内面が大は四間に二間四尺、小は三間に二間四尺、四面石積み、屋根には一寸厚の板などを使う基本仕様だった。白馬鍾ヶ岳は後に爺ヶ岳に変更され、地元平村の請負で同年八月三日に竣工した。

このたびその爺ヶ岳石室の写真に初めて接する機会を得たので紹介したい。

写真は、大正九年七月十三日、横浜の竹内鳳次郎ほうじろうが撮影したもので、妻のヒサが写っている。

竹内夫妻は結婚した大正六年から夫婦連れ立っての山歩きをはじめ、○大正八年 白馬連峰縦走 燕岳、槍ヶ岳縦走 ○大正九年 鹿島槍ヶ岳、針ノ木岳縦走 針ノ木峠からの立山・剣岳 ○大正十二年 甲斐駒ヶ岳、北岳縦走 針ノ木峠からの薬師岳・笠ヶ岳と、本格的な登山を行った。とりわけ大正九年七月の剣岳行により、竹内ヒサは女

性初登頂者となり、日本登山史に名を残した。

この写真によると、石室は小丘を隔てた種池の東(現在の種池山荘の西北角部分)にあり、別の角度からの写真も照合すると、入り口は南を向いていたようで、屋根部分は風雪のためか相当傷んでいる。「北に傾いた三角屋根」ではなく、ただひと冬の雪の重さで北側につぶれたままの姿だと伝え聞く。

この石室は昭和三(一九二八)年九月に平村に無償交付され、翌年からは村営石室として登山者の便に供した。建設当初から管理を任されていたのは柏原長寿である。やがて石室は木造小屋となり、昭和十八年に柏原が村から買い取り、現在まで三代にわたり種池の小屋の明かりを灯し続けている。

竹内鳳次郎はたいへん几帳面な人で、詳細な登山記や撮影年月日を明記した写真を多数残した。現在、竹内夫妻の甥にあたる東京在住の岡田汪氏わうが、その記録や写真を整理して夫妻の足跡をまとめている。その成果を大いに期待したい。

(大町山岳博物館学芸員)

歴史史料からみた佐々成政の

厳冬期北アルプス越え

— 松川村榛葉文書を中心にして(後編) —

荒井 今朝一

二 新屋但馬守について

では、新屋但馬守とはどのような人物なのであるのか。実は、表2は榛葉家が所蔵する戦国期文書の一覧であるが、同家には、この連署状以外にこれと同時代の文書三点が残されている。これらの四点の史料によれば、この人物は本姓標葉氏で、天正三年(一五七五)

とされ、同地の浄心寺は小笠原貞政の開基で、同寺に残る過去帳によれば小笠原貞政の戒名は、榛葉家の先祖新野嘉右衛門のそれと一致している。このことから、新屋但馬守＝標葉但馬守＝新野嘉右衛門＝小笠原但馬守貞政ということが、類推されるのである。

なお、表3は、この小笠原但馬守貞政に関する史料の一覧であるが、史料番号1によれば、小笠原貞政は安曇郡の支配に關し、松本城主である貞慶に代わって配下の武将たちに命令できるほど強力な権限を有していたことが知られ、資料番号4の『笠系大成小笠原系図』によれば、小笠原氏の親族中には小笠原貞朝の曾孫として、この人物に比定される「九市郎但馬」の名が見える。

三 標葉氏について

戦国時代の武将が、その居住地や出自、縁組み等によって転々と姓や名乗りを変えることは珍しくないが、それにしてもこの人物の場合、頻繁に姓が変わり過ぎてるように思われる。以下、その間の事情について考察してみたい。

また、榛葉家には江戸時代後期、その時の当主が同家の伝承を書き留めた「伝用事」と標題された文献が残されており、これによれば、これらの文書を榛葉家に伝えた同家の先祖は「新野嘉右衛門」といい、現在の南安曇郡三郷村小倉にあった小倉山城の城主であったが浪人して松川村に訪し、平林加賀守の養子となり、榛葉を称したことが記載されている。一方で、享保九年に松本藩が編纂した『信府統記』巻十八「松本領古城記目録」によれば、小倉山城の城主は小笠原但馬守貞政

標葉氏は、鎌倉時代に甲斐源氏である小笠原氏が、甲斐から信濃へ移住した当時、これに随って信濃へ入国した小笠原氏の一族で、慶長年間に二木寿斎が著わした『二木家記』には、標葉、下枝、於曾、櫛置の四氏を「小

表2 松川村榛葉家所蔵の戦国期文書一覧

史料番号	史料名	年代	差出人	宛て人	記載内容、史料の概略
1	武田勝頼官途朱印状	天正3年 (1575) 10月	武田勝頼 (朱印)	標葉但馬守	武田勝頼が標葉某を但馬守に任じたときの辞令。標葉氏は、小笠原氏が甲斐(山梨県)から信濃へ移住したとき、これに従った旧臣で、下枝、於曾、櫛置の3氏と共に小笠原氏の四天王といわれた。 本文書は中央に「標葉但馬守」と大きく墨書し、武田氏の公印である龍丸の朱印が押印してある。天正3年当時信玄は既に死亡しており勝頼が家督を嗣いでいた。この年5月には長篠合戦があり、武田氏は織田・徳川連合軍に大敗北を喫していた。
2	大久保忠隣・本多正信連署状	年号記載なし (天正13年か) 10月17日	大久保忠隣 本多正信	新屋但馬守	徳川家康の重臣大久保忠隣・本多正信が、家康の命をうけ、「越中往復通用の衆」に便宜をはかった新屋但馬守に感謝して送った礼状。(詳細は本文中に別記)
3	小笠原貞慶黒印状(軍令状)	年号記載なし (天正14年か) 9月18日	小笠原貞慶	標葉但馬守	安曇・筑摩の旧領を回復した松本の小笠原貞慶が、越後の上杉景勝に送る援軍の指揮官を標葉但馬守と細萱河内守(長知)に命じた際の軍令。小笠原と上杉は、前年まで各地で激戦を繰り返しており、豊臣秀吉の命で両者が和解した結果、越後の戦闘(新発田重家の乱か)に上杉方として援軍を送ることになった。
4	直江兼續書状	年号記載なし (天正15年 または16年) 正月20日	直江兼續	標葉但馬守	直江兼續は上杉氏の家宰ともいふべき、景勝が最も頼りとした重臣。この史料は前史料で送られた小笠原の援軍に対し、上杉方から送られた礼状であり、返礼が遅れたこと詫びていることから新発田重家の乱が鎮圧された天正15年の翌、天正16年のものと考えの方が妥当か。

笠原四天王」としており、古くからの重臣であった。また、戦国時代には「小笠原門葉衆」として、「標葉与五郎正信 二百五十貫」の名が見え、貞慶の父とされる小笠原貞時が、武田晴信（信玄）のために大敗北を喫した天文一七年（一五四八）の塩尻峠合戦にも出陣している。

この合戦を契機に小笠原長時の勢力は衰退の一途をたどり、ついには武田氏に追われて一部の家臣を同道し近畿地方へ逃亡するのであるが、この人物は、長時には従わずに武田氏に臣従し、天正三年には但馬守に任ぜられたのである。一方で『笠系大成小笠原系図』によれば、小笠原貞政に弓術を伝授した標葉景林は、武田氏とも関係が深く、しかも但馬の父とされる小笠原定政（貞政の叔父）は、武田信虎の養子となっており、この間の事情から小笠原但馬守は、武田氏の家臣となる際に小笠原を名乗ることをはばかり、標葉家を継承することにして標葉但馬守を名乗ったのではないかと考えられる。その後、武田氏滅亡後は前述のように再び小笠原貞慶に仕え、一族として重く用いられたが、佐々成政一行に対する手配を行った際は、彼の屋敷があったとされる現在の三郷村小倉新屋敷の地名を用いて「新屋但馬守」を名乗っていたのではないだろうか。

なお、史料1の文中には「先年のちなみ」との文言が見られることから、彼と徳川氏の間には前々からなんらかの関係があったことが知られる。おそらくは小笠原貞慶が松本復帰当初、上杉氏に対抗するために家康に臣従する姿勢をとっていたことから、両者間の使者などを勤めていて、このときには既に懇意になっていたものであろう。

表3 小笠原（新屋・標葉）但馬守関係史料一覧

史料番号	史料名	年代	差出人・著者	宛て人	記載内容、史料の概略
1	小笠原貞慶判物 (北安曇郡八坂村北沢文書)	年号記載なし (天正11年 または12年) 12月16日	忠次郎貞正 (小笠原但馬守)	細萱河内守	現八坂村の大平(北沢)孫左衛門が、自分の給地や馬を勝野源助が年貢の形に横領したことを小笠原貞慶に訴えたので、貞慶に代わって忠次郎貞正(政)が勝野源助の寄親(軍事上の上司)である細萱河内守(長知)に、その返還を命じたもの。 他の史料から忠次郎貞正は小笠原但馬守であることが知られ、さらにこの人物は、標葉(新屋)但馬守と同一人であることがわかる。
2	『信府統記』第十八 「松本領古城記」	享保9年 (1724) 発刊			『信府統記』は松本藩水野氏が松本藩領をはじめ信濃全体の地理や歴史、統治などについてまとめた参考資料。この中に、現在の南安曇郡三郷村にあった小倉古城について、「この辺の地頭小笠原但馬守貞政(中略)浄心寺牌所なり」と記載されており、城主が小笠原但馬守であったことが知られる。
3	標葉家々伝書留「伝用吏(事)」	文化元年 (1804)			文化年間当時の標葉家当主が、標葉家に伝わる伝承を書き留めたもの。これによると標葉家の先祖は新野嘉右衛門といい、元来、(安曇郡)小倉の城主の子孫であったが、松川近在を支配していた平林加賀守の世話になり、やがて跡継ぎがなかったので、その養子になったことが記載されている。これによって新野嘉右衛門は標葉(新屋)但馬守自身か、またはその子であることが推察され、標葉家に標葉(新屋)但馬守関係の戦国期文書が伝来した事情が理解できる。
4	『笠系大成小笠原系図』		溝口政則 二木貞持		江戸時代にまとめた小倉藩小笠原氏の系図。内容には信のおけない部分もあるが、この中で小笠原貞朝の二男を貞政とし、その孫の九市郎を「但馬、忠真の家令なり」としている。また貞政についても「弓馬的伝師範標葉某入道景林」とし、標葉氏と子弟関係にあったことを記し、つながりが深かったことをうかがわせる。

四 小倉（三鄉村）城主が意味するもの
佐々成政が旧暦一二月上旬（現在の二月上旬）に北アルプスを越えたとする見解には、

古くから時期やコースに異論が多いが、以上の経過から浜松へ到着した時期に間違いはなく、信州を通過したことからすれば、どこか

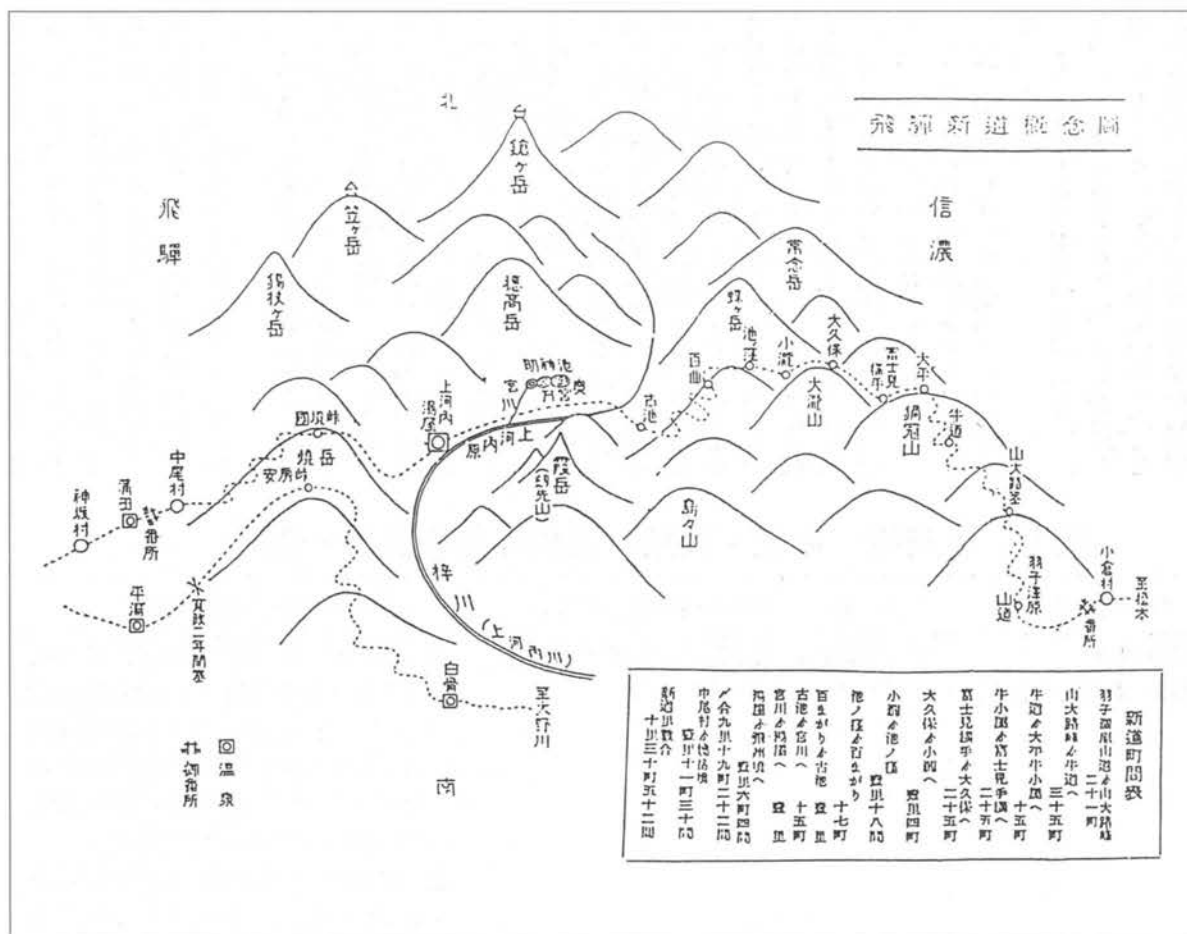


図1 飛騨新道(小倉新道)概念図(中島正文著『北アルプスの史的研究』より)

の場所では北アルプスを越えなければ富山から浜松へは向かえない。では、どこで北アルプスを越えたのであろうか。

こゝで問題となるのが、新屋馬守の居城が現在の三郷村小倉にあったことである。この地は、古くから鍋冠山と大滝山の鞍部を越えて上高地の明神池へ通じる山道があり、明神池河畔には穂高神社の奥宮も設けられている。上高地からは、焼岳山頂の南側を通り飛驒の神坂村へと通じる古道があり、このルートでの飛驒と信濃の文物の交流は有史以前にさかのぼる。このため文政三年（一八二〇）には、小倉と神坂の間に、いわゆる「飛驒新道」（小倉新道ともいう）が整備され、近世末には相当量の人や物資が通行していた。特に、焼岳付近は地熱のために冬季間も積雪が非常に少なく、天正一三年には噴火も確認されている。

また 成政の居城富山は、北陸方面では確かに北の上杉勢と南の前田勢に挟撃される事態となっていたが、南方の飛驒を領していた三木自綱は成政に与力しており、後に成政は豊臣秀吉に降伏して許されているが、自綱の息子二名は成政に味方したことが原因で秀吉により成敗されている。

佐々成政と飛騨新道では時代は異なるが、新屋但馬守が成政一行の通行に便宜を図っていることからすれば、以上のような状況を総合的に判断すると北アルプスを越えたのは、富山から飛騨・焼岳・上高地・鍋冠山・小倉のルートとみるのが、最も自然と考えられる。

しかし、新屋但馬守が、前述のように大町方面まで含めた安曇郡全体に対する総括的な指揮権を有していたとすれば、多くの伝承が残り、後代の文献も支持する針ノ木峠経由ル

ートなどといわゆる「さらさら越え」も捨てがたい要素をもっている。特に、富山側から見たときに立山への登頂参拝の基地が芦峯寺であつたことや、山に習熟した先達や山伏、獵師などの協力を求め、彼らを徴用するためには、あるいは、往路は芦峯寺から室堂―針ノ木峠經由ルート、復路は季節的な制約や雪崩の危険性などから飛騨ルートであつたことも想定される。

五 まとめ

冒頭にも記したとおり佐々成政の北アルプス越えについては、戦国時代末のことであり、しかも隠密裏の行動であつたために信頼できる史料は皆無に近い。その中にある本論で扱つた「大久保忠隣・本多正信連署状」については、唯一の同時代史料として最も重要視されるべきであるにもかかわらず、これまで余り顧みられないか、あるいは当初から松川村に存在したものとして扱われてきた。ここまでは、これまでの調査に基づき、これまで自らもつていた疑問点について論考を試みたが、多くが類推の域をです、今後のより批判的な検討が待たれる。その意味で、多くの方々のご指摘や問題提起を期待したい。

（おわり　但し次号にて補稿として人物等の解説を掲載予定。）

（長野県史学会会員）

山と博物館 第48巻第10号

発行 千 8-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一

TEL 026-221-0211
FAX 026-221-0211
市立大町山岳博物館

E-mailsanpaku@city.omachi.nagano.jp

印刷 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号〇〇五四〇一七一三三九三